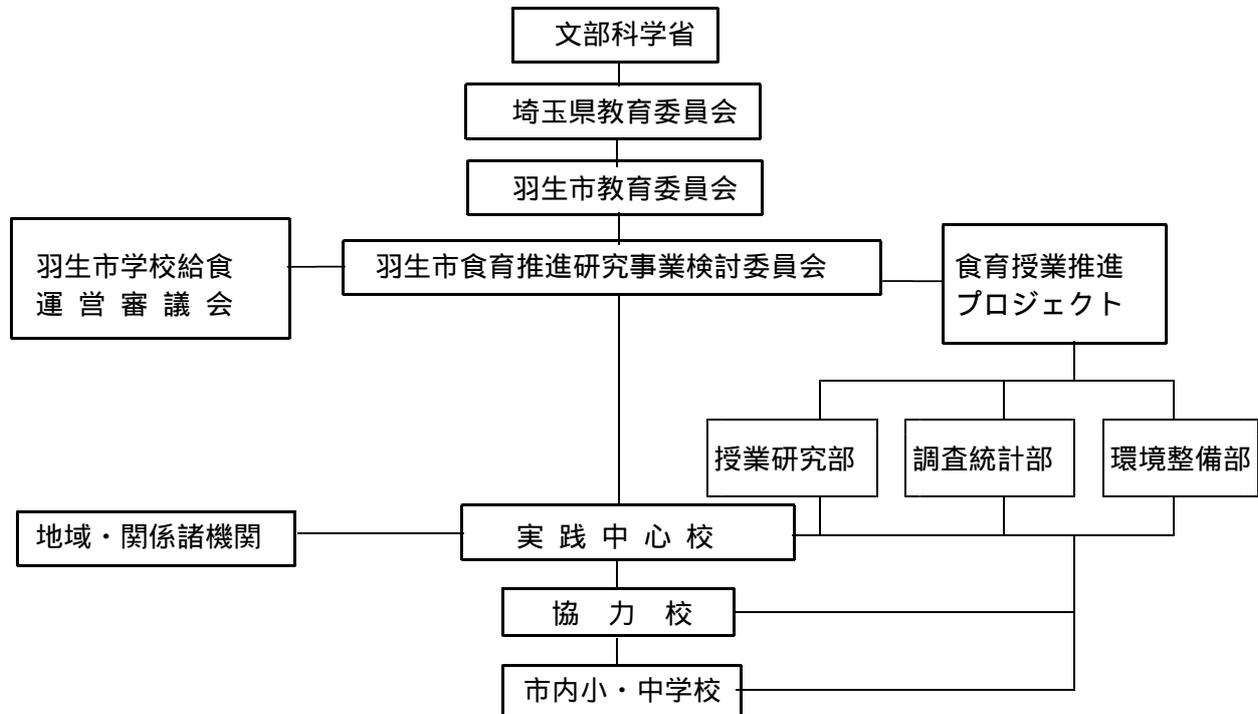


栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	埼玉県
推進地域名	羽生市

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1	栄養教諭が中核となった教科・領域における「食」に関する指導のあり方
1	<p>羽生市教育研究会家庭科部会研究授業（11月18日（金）実施）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・栄養教諭が家庭科担当者とT・T指導 ・羽生市教育研究会家庭科部会夏季研修会に栄養教諭・栄養士が参加 授業で活用する教材作成、指導案検討 ・授業研究会に食育プロジェクト委員会授業研究部も研究協議に参加 ・指導者：埼玉県教育局東部教育事務所 指導主事 永沼 清美先生
	 <p>授業の様子</p>
2	<p>市内各学校の取組状況</p> <p>(1) 学校ファームで食育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学校が学校ファームで農作物の栽培に取り組んでいる。バケツ稲作に取り組んでいる学校は、地域の方が土作りから丁寧に指導してくれた。ミニトマト作りにも地域の方に指導をいただき、「おいしく作ろう」「できたらおうちの人に食べさせてあげたい」など、一人一人が思いをもって栽培に取り組んでいる。

(2) わくわくモーモースクール

- ・岩瀬小学校において10月4日(火)実施。



わくわくモーモースクール・授乳体験

- ・栄養教諭、栄養士が参加し、子どもたちとともに体験するとともに、牛乳や、肉牛について、指導した。食の面だけでなく、命についても考えることができる取組であった。
- ・実施後、栄養教諭、栄養士が実施校において給食の時間に給食指導を行った。以前よりも命を慈しんでいただく心情がはぐくまれ、残菜量も減少した。



わくわくモーモースクール・搾乳体験

(3) 中学校特別支援学級合同学習会「ドラム缶でピザ作り」

- ・市内中学校の特別支援学級合同学習会において、学校ファームで収穫した野菜を使ってピザを作る。埼玉県立加須げんきプラザ社会教育主事による指導のもと、生地から作り、ドラム缶を加工した釜で焼き上げる。食育体験活動を通して、キャリア教育の視点も取り入れた活動で、職業教育につなげていく。

(4) 食育標語

- ・市内全小・中学校で夏季休業中に「親子で取り組む食育標語」を実施。食育プロジェクト環境整備部による計画、実施。優秀作品は市役所に展示。
- ・優秀作品には賞状を出した。

展示の様子



テーマ2 栄養教諭を中心とした学校・家庭・地域社会と共同調理場の連携による食に関する指導の取組

1 家庭・地域への啓発活動

(1) 学校保健委員会の実施

- ・埼玉県教育委員会発行「誰でもつくれる朝ごはんメニュー集」を活用した「親子でクッキング」を中学校で実施予定。
- ・朝食チェックの実施 「早寝、早起き、朝ごはん」を家庭に意識づける。自分でチェックし、保護者からのメッセージをつけて提出。
- ・朝食調べの実施 朝ごはんの重要性を朝食チェック、給食だよりで家庭に啓発し、朝食欠食率を0に近づけている。

2 食育推進に関する情報発信

(1) 給食だより等の活用

- ・実践中心校における校内給食だよりの情報を市内の学校へ提供。

(2) 朝ごはんレシピ集の作成

- ・実践中心校において、朝ごはんレシピ集を募集し、カードにして授業で活用している。埼玉県教育委員会発行の「朝ごはんレシピ集」と併用して、実践力をはぐくんでいる。

3 学校・家庭・地域と連携した食育体験活動の実施

(1) 食育でつながろう

- ・実践中心校において林間学校で訪れる福島県の方々を事前に招いて郷土料理に挑戦した。林間学校で再会し、心の交流に発展した。



事前交流の様子

東中大根栽培の様子



(2) 東中学校おでんの食材大作戦

- ・ 中学校の学校ファームで大根を栽培するにあたり、近隣の高等学校に栽培の専門知識について支援をいただき、中学校と高等学校の連携による学習を実施した。100本の大根を収穫し、収穫後は給食のメニュー（おでん）に活用し、市内全小・中学校に提供した。生育状況を各小・中学校に各種通信物で報告した。収穫後、栄養士と給食センター職員が大根の栄養価等について授業を実施した。



栄養士による授業

(3) 羽生市食育推進研究事業検討委員と各小・中学校児童・生徒との交流給食会

- ・ 羽生市食育推進研究事業検討委員を各小・中学校に招き、交流給食会を実施した。

三田ヶ谷小学校児童と「いがまんじゅう」を作ったいただいている「コスモス工房」の方々との交流給食の様子



テーマ1～2に共通する具体的計画

1 食に関するアンケート

栄養教諭が配置されている実践中心校においては、昨年度も同様のアンケート調査を実施している。朝食欠食率が年々低下しており、栄養教諭の指導が成果として現れている。今年度は新たな項目を設定して、市内全小・中学校で実施した。その結果から、子どもたちにとって、学校給食の果たす役割が大きいことがわかった。約8割の児童生徒が「給食が好き」と答えている。その理由は「食べること」だけでなく、「みんなと食べるのが楽しい」「献立のことをいろいろ教えてもらえるのが楽しい」など、情操面においても、大きな影響があることが見えてきた。そのため、本事業において、学校給食の果たす役割を常に考慮しながら進めていくことが必要であるととらえている。

2 「栄養教諭を中核とした食育推進事業研究発表会」

(1) 日時：平成24年1月20日（金）

羽生市産業文化ホールにて開催

(2) 研究発表内容（パワーポイントによる発表）

- ・ 概要説明（事務局）
- ・ 羽生北小学校（福島県の民宿の方との林間学校における交流についての取組）
- ・ 新郷第二小学校（給食に関連した取組）
- ・ 岩瀬小学校（わくわくモーモースクールについての取組）
- ・ 川俣小学校（北埼玉地区家庭科研究会と羽生市教育研究会との共催による家庭科授業研究の取組）
- ・ 東中学校（羽生ふじ高等学園との交流による学校ファームの取組）
- ・ 栄養教諭としての関わり



発表会当日の様子



発表会掲示資料

(3) 指導講評

埼玉県教育局県立学校部保健体育課 指導主事 川島 規行 先生

(4) 講演会「学校における食育の推進」

埼玉県教育局県立学校部保健体育課 主席指導主事 秋本 文子 先生

(5) まとめ

- ・朝食欠食率を低下させるための取組や、給食残食量を減少させるための取組など、栄養教諭を中心として提案し、各学校で取り組んだ。また、食育標語の取組や、食育だより、給食試食会等、給食センター、学校が一体となって食育を推進したところ、保護者や地域社会に広く啓発することができた。
- ・発表者、食育プロジェクト委員だけでなく、関わった教職員が達成感を味わい、羽生市の食育を一步前進させることができた。

数字で変化のあった事項について

本年度前期調査分のみ

- 朝食摂取率 ・小学生 99.5% 中学生 98.1% (体力・学力も向上)
- 給食の残菜量 ・9.7%
- 地場産物について ・羽生産豚肉、宝蔵寺味噌、それぞれ月1回使用。
・長ネギはほとんど羽生産のものを使用

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

羽生市全体で取り組む事業として、年度当初から全小・中学校に食育に関する取組を記録することを依頼した。その結果各学校が「羽生市全体として食育推進事業に取り組んでいる」という意識をもって日々の教育活動を実践していくことができるようになった。日常的な取組が実は食育につながっている、という認識から、食育を身近に感じ、また、その影響が広く成果につながっていることを子どもたちの姿から教職員が実感している。さらに、保護者や地域の方々にも伝えることができた。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

1 中間まとめ

食育は生きるための教育として重要であり、食べることの教育を通して子どもが外界と交わり、自分の心と身体をよく知り、自分を大切にし、自己管理のできる子どもを育てることが羽生市教育委員会として目指すところである。今回の事業を実施する中で、学校給食が果たす役割の大きさを実感している。生きた教材と言える給食を提供するために栄養教諭が日々、自己研鑽し、努力し続けている。栄養教諭による給食指導はまさに生きている指導である。給食を入りに、子どもたちが未来を切り拓く力を身につけさせていくことが重要であると実感した。

また、検討委員会は地域を巻き込むために大きな力となる。特に地域の生産者の方々の方が委員になっていただくことで、地域と食の関わりが見えてくる。ふるさとを大切に思う心情が食育からはぐくむことができる。

この事業を羽生市として、継続した取組となるようにシステムを構築することが必要であると感じている。今後、羽生市全体の取組である「羽生市食育基本計画」の策定にあたり、本事業での成果を生かしていくよう、羽生市教育委員会として働きかけていくことが必要である。

2 発表を終えて

今回の取組から本事業全体を通じた成果は次の4点である。

- (1) 市全体で取り組む体制を整備したことにより、全小中学校が食育に関する取組を積極的に推進するようになった。羽生市食育事業検討委員会、食育プロジェクト委員会等の整備
- (2) 教科等の授業に栄養教諭が入ることにより、食に関する専門的指導が可能となった。児童生徒のみならず、教師自身も食を見直すようになった。
- (3) 体験的な活動により、児童生徒に命を慈しむ態度が養われ、残さず食べることの意味を理解し

て食事をするようになった。 残食量の減少（H 2 2 : 1 5 . 2 % H 2 3 : 9 . 7 %）

- (4) 標語制作や、親子調理実習を通じて、家庭や地域社会への啓発を深めることができた。食の大切さについて家庭に理解してもらうことで、食事の時の家族の会話が増えるなど、子どもたちの心身ともに豊かな成長につなげることができた。

また、本事業全体を通した課題は次の3点である。

- (1) 各学校で取り組んだ内容を共有する時間をとることが難しかった。今後、各学校の特色ある取組を相互に共有する場の設定が必要である。
- (2) 市内で栄養教諭・栄養士が各1名しか配置されていないため、各学校の授業に積極的・継続的に入ることができなかった。
- (3) 今後、栄養教諭がかかわる食育授業を各教科等の年間指導計画に位置付け、意図的・計画的に食育を推進していく必要がある。

3 まとめ

今年度、様々な取組を通して、生涯にわたる健康の礎となる食育にはゴールが無く、継続的な啓発が必要であると再認識した。研究に取り組んだことで羽生市全体が食の重要性を見直し、その活動の第一歩を踏み出すことができた。今年度新たに取り組んだ様々な活動を来年度以降も継続・発展させていくことが、羽生市の食育のより一層の充実につながるものととらえ、さらに推進していく。